

株式会社 **amplified ai** の「**Amplified**」プラットフォームに関する詳細分析：技術、市場地位、および戦略的評価

第 1 章 エグゼクティブサマリー

本レポートは、株式会社 **amplified ai**（以下、**amplified ai**）が開発・提供する次世代 AI 特許調査プラットフォーム「**Amplified**」について、その内容、市場における評価、および評判を徹底的に分析するものである。**Amplified** は、従来のキーワード検索に依存した特許調査手法からのパラダイムシフトを提示するツールとして、知財業界で注目を集めている。

その中核を成すのは、1 億 4000 万件を超える世界の特許文献を学習した深層学習モデルである¹。この AI は、発明提案書や技術明細書といった自然言語の文章を意味的・文脈的に理解し、関連性の高い文献をデータベース全体から瞬時にランク付けする能力を持つ²。これにより、調査時間を最大 85%削減し、人間が見落としがちな非自明な先行技術の発見を可能にするという強力な価値提案を実現している²。

この革新的な技術と効率性は、旭化成、リコー、大塚製薬といった知的財産戦略に精通した大手企業からの採用という形で市場に受け入れられている¹。これは、**Amplified** が実務レベルで高い評価を得ていることの証左と言える。

しかし、その評価と将来性には重大なリスク要因が浮上している。2025 年 9 月、競合他社であるパテント・インテグレーション株式会社が、**Amplified** の機能が自社の生成 AI 関連特許を侵害しているとして、東京地方裁判所に特許権侵害訴訟を提起した⁴。この訴訟は、**Amplified** の事業継続性、財務的安定性、そして市場における評判に深刻な影響を及ぼす可能性を秘めている。

結論として、**Amplified** は技術的に非常に先進的であり、特許調査業務の効率化と高度化に大きく貢献するポテンシャルを持つ強力なプラットフォームである。しかし、現在進行中の特許権侵害訴訟という重大な法的・事業的リスクを抱えており、導入を検討する企業は、その技術

的優位性と潜在的リスクを慎重に天秤にかける必要がある。

第2章 企業プロフィール：amplified ai, Inc.

製品を深く理解するためには、その背後にある開発企業の理念と構造を把握することが不可欠である。amplified ai は、その独自の成り立ちと国際的な事業展開が、製品「Amplified」の特性を色濃く反映している。

2.1. 設立経緯とミッション

amplified ai, Inc. は、2017 年 2 月に CEO のサムエル・デイビス氏と共同創業者兼 COO の追川氏によって設立された²。同社のミッションは、人工知能（AI）を用いて人間の創造性を「増幅（Amplify）」し、特許制度が抱える課題をテクノロジーで解決することにある⁶。その根底には、AI と人間が協働することで、従来はコストと見なされてきた調査やリサーチといったナレッジワークを、価値を生み出すデータ資産へと転換できるというビジョンがある⁸。この創業理念は、単なる検索ツールに留まらず、イノベーションのライフサイクル全体を支援するプラットフォームとしての Amplified の設計思想に直結している⁶。

2.2. 企業構造と事業拠点

同社は、米国サンフランシスコに本社を置き、日本（東京）にも主要なオフィスを構える、日米にまたがるデュアルヘッドクォーター体制を採用している²。未上場のスタートアップ企業であり、成長過程で東京オフィスは品川区、目黒区、中央区へと移転を重ねてきた²。

この米国と日本の両方に拠点を置くという構造は、単なる地理的な配置ではなく、計算された戦略的選択である。シリコンバレーを中心とする米国は、最先端の AI 技術、研究者、そしてベンチャーキャピタルへのアクセスにおいて世界をリードしている。一方で、日本には世界有数の特許出願件数を誇る製造業を中心とした巨大な産業基盤が存在し、洗練され、かつ要求水準の高い法人向け知財市場が形成されている。

純粋な米国企業が日本の大企業の複雑なワークフローやビジネス文化を深く理解することは容

易ではなく、また純粋な日本企業が米国のトップクラスの AI 人材を獲得することもまた困難である。amplified ai は、米国人の CEO と日本人の COO という二文化を理解する経営陣の下、このデュアルヘッドクォーター体制を敷くことで、両市場の長所を最大限に活用する戦略をとっている。これにより、世界最先端の AI 技術を、日本の知財実務家のニーズに深く寄り添った形で製品に落とし込み、グローバルに展開する企業に対して、より信頼性の高いパートナーとしての地位を築いている。これは、技術仕様書には現れない、同社の強力な競争優位性の一つである。

第3章 プラットフォームのアーキテクチャと技術詳細

Amplified の競争優位性は、その根幹をなす AI 技術と、それを支えるデータ基盤、そしてユーザーの業務プロセスに深く統合された機能群によって構築されている。

3.1. AI エンジン：意味検索とキーワード検索の相違

Amplified の心臓部は、1 億 4000 万件という膨大なグローバル特許文献で訓練された深層学習 AI エンジンである¹。この AI の最大の特徴は、従来の特許調査で主流であったキーワード検索や特許分類コードを組み合わせたブール検索とは一線を画す「意味検索」を実行する点にある³。

ユーザーは、複雑な検索式を構築する代わりに、発明提案書、技術明細書のドラフト、あるいは関連する特許番号といった自然言語のテキストを入力する²。AI は入力されたテキストの単語単位のマッチングではなく、文章全体の技術的な意味や文脈を理解し、その「意味」に類似した文献をデータベース全体から瞬時に探し出し、関連性の高い順にランキングして提示する。これは、いわば「5000 万件の特許ファミリーを熟読・記憶し、数秒で応答できるプロのサーチャー」と対話しながら調査を進めるような体験を提供する²。このアプローチにより、専門的な検索スキルを持たない技術者でも、調査の初期段階を効率的に進めることが可能になる。

3.2. データカバレッジ、完全性、および更新頻度

AI の性能は学習データの質と量に大きく依存する。Amplified は、世界中の 1 億 4000 万件の特許データを網羅し、毎週更新することで情報の鮮度を保っている¹。特に重要なのは、グローバルな調査を可能にするためのデータカバレッジの広さである。

同プラットフォームは、中国、台湾、ドイツ、ロシアといった調査ニーズの高い非英語圏 34 カ国の特許文献について、機械翻訳による英語テキストデータを AI モデルに追加している¹⁰。これにより、英語での調査範囲は 1 億 500 万件にまで拡大した。この機能は、無効資料調査や FTO (Freedom to Operate) 調査において極めて重要である。なぜなら、英語のペタファミリーを持たない外国語の特許文献（いわゆるシングル特許）にこそ、決定的な先行技術が隠されているケースが少なくないからだ¹⁰。Amplified は、これらの文献も意味検索の対象とすることで、より網羅的で抜け漏れの少ないグローバル調査を実現している。

3.3. 主要機能とユーザーワークフロー

Amplified は、単なる検索エンジンではなく、特許業務のプロセス全体を支援する統合プラットフォームとして設計されている。

- **対話型 AI インターフェース:** ユーザーは調査の過程で、AI が提示した結果に対して「関連性が高い」「低い」といったフィードバックをリアルタイムで与えることができる。AI はこのフィードバックを即座に再学習し、ユーザーの調査意図をより正確に反映した結果リストを再構築する²。
- **プロジェクト・テンプレート:** 「発明創出」「モニタリング（競合他社や特定技術分野の動向監視）」「無効資料調査」といった主要な特許業務に最適化されたワークフローのテンプレートが用意されており、体系的で効率的な調査を支援する⁵。
- **コラボレーション機能:** チームでの共同作業を前提とした機能が充実している。ライセンスを追加すれば、閲覧のみを行う「ビューア」を無制限に追加でき、プラットフォーム上で特定の文献に注釈（アノテーション）を付け、チーム内で共有・議論することが可能である¹。
- **従来型検索機能との融合:** AI によるランキング機能を主軸としつつも、キーワードによる絞り込みやハイライト、ブール論理式を用いた検索、特許分類コードによるフィルタリングといった、プロのサーチャーが使い慣れた従来型の検索機能も完備している。これにより、AI による広範な探索と、専門家による精密な絞り込みを組み合わせたハイブリッドな調査が可能となる¹。

これらの機能群は、Amplified が単なる「時間を短縮するツール」以上の価値を提供しようとしていることを示している。従来の特許調査の成果物は、多くの場合、スプレッドシートや静的なレポートとして納品され、時間が経つとその文脈や調査過程での洞察が失われがちであっ

た。**Amplified** は、プロジェクト・テンプレートやコラボレーション機能を通じて、調査の「プロセス」そのもの（なぜその文献が重要と判断されたか、どのような議論があったかなど）を記録し、再利用可能な形で保存することを目指している。これは、属人的なスキルに依存しがちだった特許調査業務を、組織の「知的資産」を構築するプロセスへと昇華させる試みである。この戦略は、一度導入した企業が他のツールへ乗り換える際のスイッチングコストを著しく高める効果も持ち、長期的なビジネスモデルの観点からも非常に強力である。

第4章 市場におけるポジショニングと競合状況

Amplified の価値を正しく評価するためには、同製品がどのような市場セグメントを対象とし、競合他社と比較してどのような優位性を持つのかを明確にする必要がある。

4.1. ターゲット顧客と価値提案

Amplified は、「プロレベルの特許調査」を行うユーザーを明確なターゲットとしている²。具体的には、企業の知財部員、研究開発部門の技術者、特許事務所の弁理士などが含まれる。

その中核的な価値提案は、高度な専門知識を持つ人材（そして高コストな人材）の時間を、煩雑な検索作業から解放し、より付加価値の高い分析、戦略立案、発明の質の向上といった思考的活動に集中させることにある²。調査時間を **85%**削減するという具体的な数値目標²や、人間では見つけられない文献を発見する可能性²は、この価値提案を強力に裏付けている。

4.2. AI 特許ツールの比較分析

AI を活用した特許調査・分析ツール市場には、**Amplified** 以外にも複数のプレイヤーが存在する。それぞれが異なる強みと焦点を持ち、独自の地位を築いている¹¹。

- **Patentfield AIR:** 膨大な特許データの可視化（パテントマップなど）に強みを持ち、技術動向の俯瞰的な分析を得意とする¹¹。
- **Summaria:** 生成 AI を活用した特許文献の読解支援や要約生成に特化しており、大量の文献を効率的にレビューする業務に適している¹¹。

- **Tokkyo AI:** 検索履歴が外部に漏れないプライベートな環境を提供し、セキュリティを重視する企業ニーズに応える¹¹。
- **AI Samurai:** 発明の内容から特許の新規性・進歩性を評価する機能や、特許請求の範囲のドラフト作成支援など、特許出願前の業務に特化している¹¹。

Amplified の独自性は、特定のタスク（要約、ドラフティング等）に特化するのではなく、対話型の意味検索とコラボレーション・ワークフローを軸に、特許調査と分析の「プロセス全体」をカバーするプラットフォームを目指している点にある。以下の表は、これらのツールの特徴を比較したものである。

表 1: 主要 AI 特許プラットフォームの比較分析

特徴	Amplified	Patentfield AIR	Summaria	Tokkyo AI	AI Samurai
中核 AI 技術	意味的類似性に基づくランキング、対話型 AI	データ可視化、クラスタリング	生成 AI による要約、読解支援	類似文献検索、プライベート環境	新規性・進歩性評価、AI による書類作成支援
主要用途	先行技術調査、無効資料調査、動向監視	IP ランドスケープ、技術動向分析	文献のスクリーニング、内容理解	先行技術調査、競合分析	出願前調査、発明評価、明細書作成支援
主要な差別化要因	調査意図を学習する対話型 AI、コラボレーション機能	高度なデータ可視化機能	特許文書の読解・要約に特化	セキュアなプライベート検索環境	出願書類作成までのプロセスを支援
料金モデル	プロジェクト単位、月額サブスクリプション	月額サブスクリプション	フリーミアム、月額サブスクリプション	月額サブスクリプション	月額サブスクリプション、回数課金

ターゲット 顧客	企業知財 部、R&D、 特許事務所	企業知財 部、研究開 発部門	企業知財 部、法律事 務所、非専 門家	機密性を重 視する企業	発明者、企 業知財部、 特許事務所
-------------	-------------------------	----------------------	------------------------------	----------------	-------------------------

この比較から、**Amplified** が調査の「入口」である広範な文献探索から、チームでの「共有・分析」までを一気通貫で支援するプラットフォームとしてポジショニングしていることがわかる。

4.3. 価格戦略とアクセシビリティ

Amplified は、多様なユーザー層に対応するため、柔軟な階層型料金体系を採用している。

- **Pay Per Project** プラン: 1 プロジェクトあたり 20,000 円。定常的な調査ニーズはないが、特定の案件で強力なツールを必要とする個人発明家や小規模な特許事務所に適している¹⁰。
- **Professional** プラン: 1 ユーザーあたり月額 50,000 円（30 プロジェクト分を含む）。中小規模のチームでの継続的な利用を想定したプランである¹⁰。
- **Business/Team** プラン: 月額 75,000 円から。プロジェクト作成数は無制限で、無制限のビューアを追加できる。大規模な企業知財部や研究開発部門での全社的な導入を目的としている¹。

この料金体系は、市場の裾野を広げつつ、主要ターゲットである大企業からの収益を最大化する戦略と言える。特に、**Business** プランに含まれる「無制限のビューア」は、前述したコラボレーション機能とナレッジマネジメント戦略を金銭的負担なく推進するための重要な要素であり、製品の導入と定着を促進する巧みな設計である。

第5章 性能、導入実績、およびユーザーからの評判

企業の主張する性能が、実際の市場でどのように受け止められ、評価されているかを検証することは、ツール選定において不可欠なプロセスである。

5.1. 有効性と性能に関する主張

amplified ai は、自社プラットフォームの性能について、具体的かつ検証可能な指標を提示することで信頼性の構築を図っている。

- **精度:** 147 万件を超える実際の国際調査報告書（ISR）をベンチマークとして AI の精度を検証。その結果、人間の調査官による調査結果と同等か、それ以上の精度を持つことを実証したとしている²。これは、AI の性能を客観的な第三者の成果物と比較した強力な主張である。
- **効率性:** ユーザーは調査開始から平均約 25 分で重要な結果を発見しており、これにより調査業務にかかる時間を 85%短縮できると主張している²。
- **無効資料調査における性能:** 米国特許審判部（PTAB）の事例を用いた検証では、AI が提示した上位 100 件の文献の中に、42%の確率で無効化の根拠となる資料が含まれていたとしている⁵。

これらの具体的なメトリクスは、単なる定性的なアピールに留まらず、導入による投資対効果（ROI）を検討する企業に対して、説得力のあるデータを提供している。

5.2. 企業への導入実績とケーススタディ

Amplified の有効性は、その導入企業リストによっても裏付けられている。セントラル硝子株式会社、株式会社リコー、クラシエホールディングス株式会社、大塚製薬株式会社、旭化成株式会社、サイボウズ株式会社など、日本を代表する大手企業やグローバル企業が名を連ねている¹。

特に注目すべきは、旭化成のような企業の採用事例である。同社は、IP ランドスケープ（IPL）を経営戦略に深く組み込む先進的な企業として知られており、知財情報の活用レベルが非常に高い¹³。そのような知財戦略のプロフェッショナル集団が Amplified を導入しているという事実は、同プラットフォームが高度で専門的な要求に応えうるツールであることを示す、極めて強力な社会的証明（ソーシャルプルーフ）となっている。

5.3. 独立したユーザーからの視点

企業の公式発表に加え、個別のユーザーからの評価も、ツールの実態を多角的に理解する上で有益である。

音楽認識技術で知られる Soundhound 社の IP ストラテジストは、Amplified を「非常に印象的だ (Pretty darn impressive)」と評価し、「よく設計されたゲームのように中毒性がある」とその優れたユーザーインターフェースを称賛している¹。

一方で、より実務的な観点からの冷静な評価も存在する。ある弁理士のブログでは、Amplified を非常に有用なツールと認めつつも、その価格設定から、出願時に無料で付帯するような日常的で低コストな調査に毎回使用するのは難しいと指摘している¹⁶。その上で、侵害予防調査 (FTO) や有料での先行技術調査といった、単発で高い精度が求められる高付加価値な調査依頼において、その真価を発揮するツールであるとの見解を示している¹⁶。

これらの評価を総合すると、Amplified はあらゆる特許調査を代替する万能ツールというよりは、特に重要度の高い調査において、その費用に見合う、あるいはそれ以上の価値を提供するプレミアムな専門ツールとして市場に認識されていることがうかがえる。

第 6 章 重要評価項目：訴訟と評判リスク

Amplified の技術的優位性や市場での評価を検討する上で、現在同社が直面している最大のリスク要因を無視することはできない。それは、競合他社から提起された特許権侵害訴訟である。

6.1. 特許権侵害訴訟の分析

2025 年 9 月 5 日、パテント・インテグレーション株式会社は、amplified ai を被告として、東京地方裁判所に特許権侵害訴訟を提起した⁴。訴訟の要点は以下の通りである。

- **訴訟内容:** Amplified プラットフォームの機能の一部が、原告の保有する生成 AI 関連の特許 2 件を侵害していると主張。侵害行為の差止と損害賠償を求めている⁴。
- **原告のプロフィール:** 原告であるパテント・インテグレーション社は、単に特許を保有するだけの事業体 (NPE、いわゆるパテント・トロール) ではない。同社は、AI 特許読解支援ツール「Summaria」を開発・販売する直接の競合企業である⁴。代表者は弁理士かつ AI

エンジニアであり、業界内で複数の賞を受賞するなど、技術開発力と知財戦略の両面で高い評価を得ている⁴。

- **原告の主張:** 訴訟対象となっている特許は、第三者から複数回にわたる情報提供（先行技術の提出）を受けながらも特許庁の厳格な審査を経て権利化されたものであり、その有効性には自信を持っていると主張している⁴。また、訴訟提起前に **amplified ai** に対して詳細な警告書を送付したが、「建設的な対応」が得られなかったため、やむを得ず法的措置に踏み切ったとしている⁴。

この訴訟は、単なる二社間の法的な紛争に留まらない、より広範で戦略的な意味合いを含んでいる。原告と被告は、AI を活用した知財サービスという急成長中のニッチ市場における覇権を争うライバル同士である。訴訟の対象が、技術トレンドの最前線である「生成 AI」に関連する機能である点も重要である。

この訴訟の提起は、損害賠償の獲得という直接的な目的に加え、競合である **Amplified** の市場における信頼を揺るがすための戦略的な一手と見ることができる。現行および将来の顧客に対して、**Amplified** の製品利用に伴う潜在的なリスクを意識させ、FUD（Fear, Uncertainty, and Doubt - 恐怖、不確実性、疑念）を植え付ける狙いが含まれている可能性は高い。これにより、**Amplified** のイノベーターとしてのブランドイメージを毀損し、貴重な経営資源を製品開発ではなく法廷闘争に割かせることを強いる効果も期待できる。

導入を検討する企業にとって、この訴訟がもたらすリスクは多層的である。

1. **サービス継続性リスク:** 裁判所の判断次第では、侵害と認定された機能の使用差止命令が下され、プラットフォームの主要機能が利用できなくなる可能性がある。
2. **評判リスク:** 自社が利用しているツールが特許侵害品であると認定された場合、間接的に企業の評判に傷がつく可能性がある。
3. **企業の長期存続リスク:** 巨額の損害賠償支払いが命じられた場合、**amplified ai** の財務状況が悪化し、長期的なサービスの安定供給や将来の製品開発に支障をきたす恐れがある。

この訴訟の判決は、単に両社の勝敗を決するだけでなく、知財テック業界全体における生成 AI 関連技術の特許保護のあり方やライセンス慣行に影響を与える判例となる可能性も秘めている。したがって、**Amplified** のデューデリジェンス（適正評価手続き）において、この訴訟リスクの評価は最重要項目の一つとなる。

第 7 章 戦略的展望と推奨事項

これまでの分析を統合し、**Amplified** の将来性を展望するとともに、導入を検討する企業知財部門の責任者に対する具体的な推奨事項を提示する。

7.1. 分析結果の統合（SWOT 分析）

- **強み (Strengths):**
 - 文脈を理解する先進的な意味検索 AI 技術。
 - 調査時間を最大 **85%**削減するという、実証された効率化効果。
 - 大手企業による採用実績に裏打ちされた高い信頼性。
 - 共同作業を促進し、ナレッジを蓄積するプラットフォーム設計。
- **弱み (Weaknesses):**
 - プレミアムな価格設定であり、低価値の定常的な調査には不向きな可能性がある。
 - AI の判断プロセスがブラックボックス化しやすく、ユーザーが AI に過度に依存するリスク。
- **機会 (Opportunities):**
 - IP ランドスケープや競合情報分析など、隣接する知財分析領域への機能拡張。
 - （法的に許容される範囲で）生成 AI 機能をさらに統合し、分析・レポート作成を自動化する可能性。
- **脅威 (Threats):**
 - パテント・インテグレーション社からの特許権侵害訴訟。これは差止命令、損害賠償、深刻な評判毀損につながる最大の経営リスクである。
 - AI 知財テック分野における競合の激化。

7.2. 将来の軌道

Amplified の将来は、現在進行中の訴訟の結果によって大きく二つに分岐すると考えられる。

- **シナリオ A（訴訟に勝利した場合）**：侵害の主張を退けることに成功すれば、法的なお墨付きを得た形で市場におけるリーダーシップをさらに強固なものにできる。競合からの攻撃を乗り越えた企業として、その信頼性はかえって高まる可能性がある。
- **シナリオ B（訴訟に敗訴した場合）**：差止命令や高額な損害賠償が命じられれば、製品の根本的な設計変更、原告へ的高額なライセンス料の支払い、あるいは最悪の場合、企業の財務的安定性を揺るがす事態に発展しかねない。

いずれのシナリオにおいても、同社は継続的な機能開発によって市場での優位性を維持する必要があるが⁵、訴訟対応に経営資源が割かれることは避けられないだろう。

7.3. 導入検討企業への推奨事項

企業の知財戦略責任者が **Amplified** の導入を検討するにあたり、以下の段階的かつ慎重なアプローチを推奨する。

1. **技術力の評価と検証を最優先する:** まず、**Amplified** が持つ技術が、自社の実際の調査案件において、主張通りの性能を発揮するかを検証することが不可欠である。無料トライアルやパイロットプログラムを活用し、特定の技術分野における先行技術調査や無効資料調査を実施させ、その精度と効率性を客観的に評価すべきである。
2. **法的リスクに正面から向き合う:** **amplified ai** との商談においては、現在進行中の訴訟について直接的な説明を求めるべきである。訴訟に対する同社の見解、リスク評価、そして最も重要な点として、万が一敗訴した場合に顧客を保護するための契約上の補償（Indemnification）条項がどの程度提供されるかを確認する必要がある。
3. **段階的な導入計画を策定する:** 全社的な大規模導入を急ぐのではなく、まずは「Pay Per Project プラン」や少数の「Professional プラン」ライセンスから導入を開始し、重要度や機密性が比較的低い案件でツールの有効性と操作性を評価することを推奨する。訴訟の行方がより明確になるまで、ミッションクリティカルな業務への全面的な依存は避けるべきである。
4. **ツールセットの多様性を維持する:** **Amplified** に全ての調査業務を依存するのではなく、従来型の商用特許データベースへのアクセスも維持し、ツールポートフォリオを多様化させることが賢明である。これは、万が一のサービス停止リスクに対するヘッジとなるだけでなく、AI による広範な探索と、専門家による従来型手法での精密な検証を組み合わせるハイブリッドな調査体制を構築することにもつながる¹⁶。未来の知財業務は、単一のツールに依存するのではなく、それぞれのツールの長所を活かした最適な組み合わせによって遂行される可能性が高い。

引用文献

1. イノベーションのため知識と知性を共有する - **Amplified AI**, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://www.amplified.ai/ja/>
2. 株式会社 **amplified ai** | 検索システム | AI 製品・サービスの比較・検索・資料請求メディア「**Alsmiley**」, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://aismiley.co.jp/product/amplified/>
3. **Amplified** で全く新しい特許調査を, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://www.amplified.ai/ja/how-it-works/>
4. AI 特許調査プラットフォーム「**Amplified**」に対する 2 件の特許権 ..., 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000014.000086119.html>
5. 世界一特許を理解する AI の **Amplified**。知財の重要な業務、発明創出、モニタリング - **PR TIMES**, 9 月 18, 2025 にアクセス、

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000011.000033344.html>

6. 特許調査になぜ AI が必要なのか？ Amplified が持つ問題意識, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://www.amplified.ai/ja/blog/22062020/why-patent-ai-1/>
7. amplified ai | 企業情報 | イプロスものづくり, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://mono.ipros.com/company/detail/2089412/>
8. 株式会社 amplified ai - STORIUM, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://open.storium.jp/organization/c74e4df3ca9de5e036819e002bde9513>
9. Amplified に生成 AI 搭載 キーワード提案・要約文書生成により特許情報活用と発明創出を加速, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://yorozuipsc.com/blog/amplifiedai>
10. AI 特許調査ツール「Amplified」機械翻訳データを拡充。中国特許をはじめ非英語圏 34 カ国も英語で一括検索、AI が数秒で類似特許を発見 | DX を推進する AI ポータルメディア「Aismiley」, 9 月 18, 2025 にアクセス、https://aismiley.co.jp/ai_news/expanded-machine-translation-data-for-ai-patent-search-tool-amplified/
11. 生成 AI 活用特許分析ツールの比較分析： - よろず知財戦略 ..., 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/34eff7c02387c7ab46b1.pdf>
12. AI 特許調査プラットフォーム「Amplified」 - イプロスものづくり, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://mono.ipros.com/product/detail/2000547442/>
13. 新時代に挑む知財戦略 IP ランドスケープのススメ「旭化成株式会社」 - 特許庁, 9 月 18, 2025 にアクセス、https://www.jpo.go.jp/news/koho/kohoshi/vol49/01_page1.html
14. 知的財産報告書 2023 - Asahi Kasei Corporation, 9 月 18, 2025 にアクセス、https://www.asahi-kasei.com/jp/r_and_d/intellectual_asset_report/pdf/ip_report2023.pdf
15. 旭化成の知的財産部門における生成 AI 活用に関する調査レポート - よろず知財戦略コンサルティング, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/309afb7ceb0ed797aea3.pdf>
16. AI 特許技術調査ツールを使ってみた | 弁理士 松本文彦 - note, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://note.com/fmatsumoto/n/nc92e4ee72a72>
17. AI・人工知能を活用した特許調査ツールとの付き合い方について考えてみる - note, 9 月 18, 2025 にアクセス、<https://note.com/anozaki/n/ncelbd26cc602>